

令和 7 年 11 月 27 日(木)・28 日(金)に東北大学災害科学国際研究所で行われた「『世界津波の日』2025 高校生サミット in 仙台」に 2 年生 3 人、1 年生 6 人で参加した。このサミットは 11 月 5 日の「世界津波の日」に合わせて開催され、今年は日本各地と世界 11 力国の高校生が仙台を訪れた。1 日目はテーマごとの分科会、開会式、レセプション、2 日目は総会、閉会式が行われた。2 年生は分科会に参加したほか、代表生徒の小椋さんは開・閉会式、総会の議長を担当した。1 年生は分科会や開会式を見学したり、参加者へのインタビューを行った。



「世界津波の日」2025 高校生サミットについて

○分科会での発表について

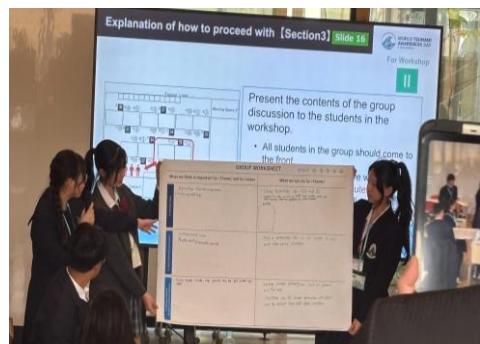
一高は「伝承と災害文化」の分科会に参加した。自校での取り組みについてスライドを作成し英語で発表した。他校の発表は防災アプリの開発や自国の災害を基に津波について考えたもの、その国や地域の地形を生かした防災についてなど多岐にわたっていた。参加者は発表を真剣に聞きながら手元の付箋にポイントを英語で次々と書き込んでいた。スライドの構成が国ごとに大きく違っていて、発表の最初に英語だけでなく自国のことばでも挨拶するなど興味を引き付ける工夫に富んでいて、自分たちがスライドを作ったり発表したりするうえで大いに参考になった。



○分科会での活動のようす

～分科会テーマ～ A 「より良い復興」 B 「多様なステークホルダーの参画」 C 「伝承と災害文化」

各国ごとのスライド発表の後、参加者が分散して新しいグループを作り、「自分たちにできること」「大事なポイント」を 1 枚の紙にまとめていた。初対面どうしにもかかわらず英語での発言が飛び交い、よ

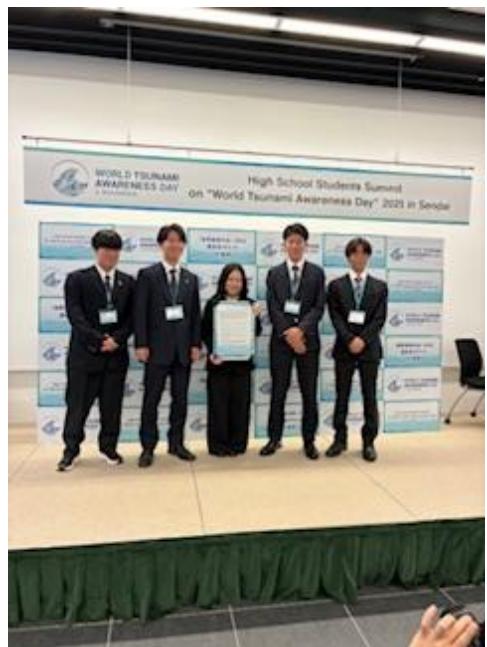


りよい議論にしようとする熱意を感じた。休憩時間にタイから参加した生徒にインタビューしたところ、同じグループのメンバーを見ながら「私たちはもう友達です」と嬉しそうに話してくれた。最後に班ごとに話し合った結果をポスターにまとめ、分科会の参加者に向けてプレゼンテーションを行った。最後に各班のポスターをもとに分科会としての意見をまとめて分科会は終了した。



○「仙台未来宣言」について

2日目は分科会ごとの提案を基に、参加した高校生が大切だと感じたことや私たち高校生にできることをまとめた「仙台未来宣言」が採択された。この宣言ではこれまでの大規模災害の教訓とした復興に向けた計画の作成、防災への多様なステークホルダー形成のための活動、教訓をつなぐ伝承と災害文化のための具体的な案が提示されている。災害を直接経験していない次世代が防災・減災についてゲーム等を活用し楽しく学ぶことができる教材の作成など、次世代へと語り継ぎ私たちの“未来”のために一人ひとりが行動するという強い思いが込められた「仙台未来宣言」を採択し、「『世界津波の日』2025 高校生サミット in 仙台」は閉幕した。



○レセプションについて

1日目の夜に、参加校が集まって交流するレセプションが行われた。聖和学園高等学校の「雀組（すずめぐみ）」によるすずめ踊りでは、参加者も一緒に踊って楽しんだ。伊達武将隊やむすび丸によるパフォーマンスでは日頃目にすることのない武士の姿に海外の生徒が興味深そうに見入っていたり写真を撮ったりしていた。県外の高校生や海外の高校生に宮城の文化や魅力を感じてもらうだけでなく、学校や国の枠を超えて多くの生徒との仲を深めることができる素晴らしい場となった。

○サミット全体を通して

サミットに参加するにあたり、県内の震災遺構に地域の人や県外の人が絶えず訪れるためのアクションプランを考えた。震災遺構は尊重され丁寧に扱われるべきものではあるが、地域の人が集まる場所として利用することや、東北の魅力である祭りを利用して震災遺構を訪れるきっかけにすることなどを分科会で提案した。災害を経験した方々の話を聞き、実際に津波を経験していない私たち高校生にも取り組める防災・減災についての提案があり、津波や復興、防災について新しい視点を得ることができた。分科会やレセプション以外でも、昼食や移動の時間に国の伝統のお菓子を配ったり、お互いの学校生活の様子を紹介しあうことができ、他国文化を感じることができた。2日間、英語で会話することで英語力の成長にも繋がった。また、いろいろな国の人と実際に会話することで文化や習慣、価値観の違いを実感し視野が広がり、今回のサミットに参加した全員にとって、またとない貴重な経験となった。

NY 国連での「世界津波の日」啓発イベントに参加して

ニューヨークにある国連本部で世界津波の日高校生サミットについてプレゼンテーションをすることになった。レセプションでは茂木敏充外務大臣をはじめとするたくさんの方々にお褒めの言葉をいただいた。また、後日訪問した日本政府代表部や、UNDRR（国連防災機関）では、私たち若い世代の声と姿勢が防災に強い国を作り、防災を世界に広める支えになるとお話をいただいた。津波災害を過去のものとすることはなく、どんな立場、年齢、性別であっても、自分事の経験として、教訓を被災地から世界に発信し続けることで多くの命を守ることができると改めて感じることができた。急遽渡航が決まり、短い期間でスピーチを準備しなければならなかつたので、気が付けば国連訪問当日だったと感じるほどとててもあわただしかつたが、終わってみればサミット議長の仕事と併せて、二度とない貴重な体験になった。（2年 小椋琉華）